13人で大槌町へ
～被災地ボランティア記①～

東日本大震災が発生して早や二年になろうとしている。

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災、最も強いところでマグニチュード9・0だった。十六年前の一九九五年一月にもマグニチュード7・3という大地震が阪神・淡路を襲った。改めて日本が火山列島だと痛感する。

阪神・淡路では死者六千四百三十四人、行方不明者三人。家屋の全壊は十万四千九百六戸だった。これに対し、今回の東日本大震災では死者一万五千八百五十四人、行方不明者が三千百五十五人。家屋の全壊は東北三県に集中し、宮城八万五千四百十四戸、福島二万千六十八戸、岩手一万九千二百十二戸で、戦後最悪の災害となった。

阪神・淡路と今回の東日本大震災との大きな違いは津波だ。東日本では最大で二十二メートルを超える津波が三陸沿岸を襲った。被害の多くは津波によるもので、行方不明が今も三千人を超えるのもそのせいだ。

地震発生は午後二時四十六分、津波が押し寄せたのはそれから三十分前後あとだった。もし、この地震と津波が夜に発生していたら被害はさらに大きかったといわれる。

さらに東日本大震災は津波によって福島第一原子力発電所が大きな被害を受け、放射能漏れが発生した。

地震、津波、放射能漏れという三重苦の大震災は、発生から満二年になるというのに仮設住宅に住む人が三十二万人を超え、復興が大幅に遅れている。

現在、山口教会におられる柴田潔神父（四十八歳）は震災直後から現地にボランティアに行き、最初は個人でガレキの処理などを手伝う。最近は一人でも多くの人に震災の現実を知ってもらおうと若者を中心にグループで現地を何回も訪れている。

昨年十月二十八日、私が所属する下松カトリック教会のバザーは東日本大震災被災者支援のためにした。当日は柴田神父に来てもらい、映像を使っての報告会やパネル展を開いた。その時「現地にボランティアに行きませんか」とお誘いを受けた。

長女は仕事の合間に三回、福島にボランティアに行っている。娘から話を聞く度に自分も行きたいと思うが、七十を越え、一級障害者の自分には無理だと自分で決めていた。

しかし柴田神父は「最近はガレキ処理などの力仕事ではなく、被災者の話を聞く傾聴など体力がなくてもできるボランティアがある。大切なことは自分も行って何かをしようという意志だ」と言われた。

何ができるかよくわからないままに年末の十二月二十五日から三十日までボランティアに参加することにした。妻は山口市に住む娘に預け、柴田神父を団長に十三人のスタッフの一員として岩手県大槌町を訪ねた。

津波で町役場などが壊滅的被害を受けた様子をテレビの映像で何度も見た地域だ。二年という歳月は被害の現実を少しずつ風化させている。

被災地で見たこと、感じたことが少しでも風化の防止に役立ってほしいと願いつつペンを取る。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

連日一面トップで伝えられた震災だが、今は…。

壊滅的被害を受けた大槌町役場